

学生部では、本年度も冬季セミナーを企画しています！

# 冬季セミナー 実施予告!!

仲間と過ごす最高の数日！  
考え、チャレンジし、  
そして得られる喜びと  
達成感！この冬一番の感動  
間違いなし♪♪

～同志社大学の学生さんと一緒にの冒険！～

雪洞やかまくら造り、かんじきをはいてのスノーハイクなど、

大自然の中で、大学・学部・学年を超えた交流をしてみませんか？

日 程：2006年2月28日(火)～3月2日(木) (予定)

場 所：長野県小谷村

参加費：16,000円前後 (予定) ※交通費が別途必至になります。

※12月8日(木) 9:30から先着順で受付をはじめます。

詳細については、下記の受付窓口までお問い合わせ下さい。

【受付窓口】

多摩キャンパス:学生課

☎ 0426-74-3471

後楽園キャンパス:理工学部学生生活課

☎ 03-3817-1716

昨年のセミナーの状況を下記のwebページでご覧頂けます。

<http://www2.tamacc.chuo-u.ac.jp/gakuseibu/event/winter/winter2005.htm>

昨年度の参加者の感想をご紹介します。

## 『雪山体験を終えて・・・』

雪深い長野の奥地、小谷で過ごした2泊3日は、少し長めの夢をみているようだった。それほど、非日常的な体験だった。

この冬季セミナーを運営するOBSのプログラ

文学部社会学科4年 若林愛香  
ムにはもともと、体験(チャレンジ)を通して「仲間」や「自分」と向き合う目的があった。しかし、私は雪の体験だけを期待していたので、「自分」や「仲間」という言葉に対する違和感があり、

体験から何かを学ぶことにはさらさら期待していなかった。でも、そんな私にも二泊三日のプロセスの中で“考える”時が与えられ、心身ともに成長させられるセミナーとなったと思う。

想像の中の冬季セミナーはキラキラした雪の世界が広がっていた。小谷も真っ白い雪の世界が広がっていたが、実際に雪を掘ったときの、スコップを持つ手に伝わるずっしりとした感触に目が覚め、一抹の不安を覚えたものである。

雪の世界が決して甘くないと知った二日目、「雪洞を掘ってグループ全員で一晩寝る」というチャレンジが課された。オーバーかもしれないが、「死」と隣り合わせのチャレンジだった。思っていたよりも雪の天気は過酷で、体力のピークがすぐにやってきた。それに伴って精神的に余裕がなくなって、ひょっこりと本当の自分が顔をだした。その自分の姿にみたものは、自分勝手に、他人を思いやることのできない「弱さ」だった。

だがそんな時、目標を同じくして、自分の持てる力を与え合うメンバーの姿が私の励ましとなった。会ってまもない関係であるのに、まったく異なる能力やキャラクターを持った存在が、私に「弱さ」を気付かせた。そして、同時に励ましを与えてくれた。そして、「弱さ」を補い合う以上の関係に、喜んで他人のために自分を与える（積極的に犠牲にする）生き方を教えら

## 夜中の流れ星

「また参加したい！」と昨日までの3日間の冬季セミナーを振り返りそう思う。今、これを読んでいる「これまで冒険無縁だったあなた」にはぜひとも参加してもらいたい。新たな自分の可能性を見つけ、自信を持つことができるはずだ。3日間の疲労と耐寒の後で。



れた。

「生きる」のに必死だった私は、その夜に、「生かされている」ことを思い起こさせてくれる世界に出会った。それは、夜中にトイレ（インストラクターが雪で作った逸品！）へ行ったときに見た世界。月の光に照らされた雪の中で、完璧な美しさを保ち続ける自然の姿に圧倒されて立ちすくんだ。雪山の変化一つにも、うろたえてしまう小さな自分の姿と、まったく完全な美しさと強さを放つ自然の世界。「生死」を考えるような環境で、この自然を創られた方が私の命に、今日も「生きよ」と命じていたのだ、と深く感動した。

今も、私は自分の弱さを持っている。だが、弱さを知って、与える生き方を目指そうという決意が生まれている。今共にいる人のために命を使うような、そんな者に次第に変えられていきたい、と、雪山体験後の今日も願っている。

## 経済学部2004年度卒業 久保朋子

特にメインイベントとなる2日目の標高差150m、1kmの行程を雪原の中進み、雪洞を掘り、そこで寝るプログラムは、2mを超える積雪と昨晩からの新雪にズボズボ足を取られながらの前進と足先の感覚のなくなる寒さには、何でお金を払ってまでこんな辛い目にあっているのか自虐的だなと苦笑いまじりだった。卒業記念にと一緒に参加した友達は別班で、私は初対面の中大生3名、同志社大生5名の第1班に配属された。班のメンバーは、1年生から4年生までおり、23歳の私は年長の方だった。年下メンバーの素直でかわいらしい姿やまた時に未熟な言動は微笑ましく、かつての自分が重なり、大学時代を通した自分の変化と成長を感じ

させた。こういった極寒の中、誰もが辛い状況で、他人を思いやること、気を配ること、今すべきことに懸命に取り組むことは難しく、だからこそ目立ち、自他の印象に残るものだ。

ところで、自分の最大の難所はメインイベントがようやく終了した夜、寝袋に入ってからやってきた。疲れているが、体が冷え切って寒くて目が冴え一向に眠れる気配がない。朝までの6時間一体どうしようかと半ば絶望的になった。やはりあの時の時間の重さと寒さはあの時の自分にしか分からないし、ここで筆舌には尽くしがたいものだ。そのうち嫌なことに尿意が……。トイレに行くには、ビニールに入れ

たスキーウェアと長靴をもう一度取り出し着込まなければならない。面倒くささに一度は尿意を忘れようとしたが、やはり自分は騙せず、意を決して着替え外に出たら、満天の星空が迎えてくれた。一瞬のうちに今までの面倒臭さや不安が吹っ飛び、逆に夜1人雪山に立っていることに開放感と嬉しさが広がった。意気揚々に用を済ませた戻り道にはサッと流れ星が。自然の小さな贈り物に感激し、このプログラムを乗り越えられるぞと確信できた。歩いたおかげで体も温まり、寝袋での寒さも和らぎ、その後はメンバーと寝袋の中からぼそぼそと話しながらいつの間にか眠りについていた。

## 他大学との交流

私は、多くのすばらしい人と出会ってさまざまなことを得たいと日々思っているのので、毎回新しい出会いがある同志社大学のプログラムにはよく参加しています。そして、毎回プログラムが終わるごとに、尊敬できる人に出会い、自分の未熟さを実感しています。



今回参加させてもらったスノーアドベンチャーは中央大学と合同でおこなうということで、他大学の学生と一緒におこなうプログラムというのは私自身初めての参加だったため、こういったものになるのかまったくわからず多少の不安はありましたが、同志社大学という枠組みを超えての人との出会いがあると思ったので楽しみでたまりませんでした。

プログラムが始まると、大学が違っててもそんなことはまったく関係なく、すぐに打ち解けることができました。プログラムの中では慣れない雪の上で厳しい場面もたくさんありましたが、その都度やさしい言葉を何度もかけてもらって、とても勇気づけられました。また大学の場所が東京と京都ということで、言葉や習慣が違う面

同志社大学 政策学部政策学科2年 松本亮太も多く新鮮なことだらけでそういった点も普段では味わうことのできない楽しさでした。3日間という短い時間でしたが、多くのすばらしい

人との出会いがあり、一生忘れることのできない思い出となりました。厳しいプログラムだった分だけみんなと一致団結できて、プログラムが終了した時には言葉では表せられない達成感がありました。別れの時には、今までずっと一緒にいた人たちがなぜ別の方向へ帰って行って

しまうのだろうと不思議な気持ちになるほど寂しさでいっぱいでした。

普段の大学生活ではなかなか他大学の学生と交流する機会は無いです。だからこそ今回のようなプログラムはとても価値のあるものだと思います。他大学と合同でおこなうプログラムというのは同志社大学ではまだほとんど無いのですが、この先もっと増えてくことを願っています。他大学の学生と交流することは、いつも以上に多くの出会いや発見があるでしょう。またいつか中央大学のみなさんと交流できることを楽しみにしています。

今年の冬、忘れられない素敵な思い出を  
一緒につくってみませんか？

